

魚病対策調査

鈴木博也，三代耕二

今年度，魚病発生の顕著な事柄については，宍道湖においてフナを主体とする魚類の斃死が起り，その原因について調査を行なった。その他の魚病については，依頼のものについて診断と処置指導を行なったので概要について報告する。

1. 宍道湖の魚類斃死について

イ) 斃死魚発生の状況

斃死魚は，湖内全域でみられたが，カワチフナ，フナが殆んどで，稀にウグイ，コイなどがみられた。斃死は50年4月中旬頃から発生し，同年5月末頃まで続いた。

ロ) 観察の結果

同年5月20日から6月3日の間，湖内東部と西部の両水域で，フナ類，ライギヨ，ウグイを採捕，観察した。

フナ類は17尾中3尾が正常であったが，14尾は頭部，軀幹部，尾部，鰭，鰓，腎臓，筋肉などの一部に，血腫，立鱗，穴アキ，潰瘍，欠損，腐敗，発赤などの病変，又は，異常が観察された。ライギヨ，ウグイには，これらのことは観察されなかった。

ハ) 細菌検査の結果

フナ類13尾で細菌分離培養を行なった。病変又は，異常が観察されたフナの血液，その他から出現した菌株は，*Aeromonas hydrophila* Sub sp. *hydrophila* と同定された。（同定は，広島大学水畜産学部水産学科 室賀清邦氏に依頼）

正常とみられるフナからは，この菌株は出現しなかった。

ニ) 感染実験の結果

この菌株を稚ゴイ10尾に，魚体重100gr 当り10mgr の割合で接種した。水温28℃下で1日目に9尾が，3日目にのこりの1尾が斃死し，この菌株は病原性ありと判定した。

ホ) 原虫類の寄生状況

フナ類では17尾中3尾の各鱗に吸虫の被嚢体が，ウグイ1尾の鰓に粘液胞子虫の被嚢体が，寄

生していたが、その他の大半の魚には、顕著な寄生体は観察されなかった。

へ) 斃死の原因

これらのことのみで、フナ類などの大量斃死の真の原因について言及することは不可能と思われるが、多くのフナ類の病魚の血液、その他から、A. hydrophila が分離されたことからすると、これが斃死原因の一部とも推測される。今回は斃死状況に併せ水域の環境調査は調査の時期を失し出来なかった。

2. 魚病指導について

診断の依頼のあったものについて、原因を調べ、処置法の指導を行なった。魚病の多くは、色ゴイの穴アキ病、原虫寄生症によるものであり、又、飼育環境の悪化によるものもあった。その状況は30件以上にも及び下表に示す。

表 昭和50年度 魚病診断の状況

魚種名	病名又は症状	原因	対策	件数
色ゴイ (真ゴイも 含む)	えらぐされ病	カラムナリス菌	フラン剤薬浴	2
	穴あき病	エロモナス菌	"	11
	原虫寄生症	ウオジラミ	有機燐剤薬浴	7
		イカリ虫	"	5
	白点病	イクチオフテイリス	環境管理	3
	食欲不振	酸素不足	注水管理	1
	水カビ病	水生菌	殺菌剤薬浴	3
ヤマメ	IHN	ビールス	粗密度飼育	1
	せつ瘡病	エロモナス菌	サルファ剤投与	1